江戸時代後期の京都の町家における二条番衆の寄宿形態

THE BOARDING SYSTEM FOR NIJO-CASTLE CARETAKERS WITH MACHIYA IN THE END OF EDO PERIOD

丸山 俊明*

Toshiaki MARUYAMA

In the end of edo period, town people in Kyoto are obligated by Tokugawa Shogunate to accept and treat Nijo-castle caretakers (Nijo zaiban) in their machiya about few days. Town people in Kyoto have to prepared five or six room house for Nijo-castle caretakers. This paper aims to clear up the detail of this boarding system by investigation about town people's documents and concrete sample.

Keywords : *Kyoto, machiya, kishuku, Nijo-castle, nijo-castle caretakers*
京都, 町家, 寄宿, 二条城, 二条在番

1. はじめに

江戸時代の京都では町家が上洛武士の宿に供される場合があった。京都町奉行所（以下、町奉行所）の行政例を記録した『京都御役所向大概覚書』には、享保元年（1716）に松平讃岐守が將軍名代として上洛し、土佐藩邸を宿とする事が決まった時、その家臣のため町家 150 軒への寄宿要望が町奉行所へ出され、これに町奉行所が町人との直接交渉を許し、その旨を周辺町々に通知した記録がある^{注1)}。

藤川昌樹氏の研究によれば^{注2)}、江戸時代の京都における同様の寄宿は幕初の將軍上洛に始まる。随行した各藩は幕府の許可を得つつ京都藩邸の有無や軍団規模に応じて自律的に寄宿先を確保、藩主が社寺・藩邸・上層町家に入ると、家臣は周辺町々の町家や近郊農村の民家へ寄宿、小屋がけも行い 30 万人以上の宿を確保したという。

その後、將軍上洛は文久 3 年（1863）まで途絶えたが、將軍名代や幕府上使の上洛は幾度もあったので、土佐藩邸等その宿の周辺の町々では、家臣による町家への寄宿が繰り返された可能性が高い。

ところで『京都御役所向大概覚書』は、町奉行所の許可を得た讃岐守側が直接交渉で先ず町家 200 軒の確保を報告してきたとし、さらなる選択で 150 棟に絞り込む事を予想している^{注3)}。そうすると寄宿先の町家には何らかの選択基準があった事になり、広く使いやすi等が想像されるにしても、江戸時代の京都の町家を受け入れ可否で分けた選択基準は報告されていない。そこで本論では二条在番の番衆寄宿の史料を取り上げて、選択基準を含む寄宿形態を検討する。

二条城は寛永 11 年（1634）の家光上洛以降、城主（將軍）不在となったので、江戸大番組 12 組から毎年 2 組（1 組に石高 5 千～1 万の大番頭 1 人、600 石、の組頭 4 人・200 石の番衆 50 人）が 4 月に

上洛、前任と交代して東西組屋敷や東西番衆小屋に入り、二条在番を勤めた。寛永 2 年（1625）に二条城代と共に設置された当初の番衆は 1 組 30 人であったが、家光が上洛した寛永 11 年に 50 人へ増員され、元禄 12 年（1699）の二条城代廃止後は文久 2 年（1862）に京都守護職設置に伴い二条定番（定員 2 人と与力・同心）が常設されるまで、与力 10 人・同心 20 人を指揮して城内の警衛を続けた^{注4)}。

この二条在番の番衆が、上洛後に前任の退去と交替入城を待つ間、町家に数日寄宿した。本論は、この番衆寄宿に関する江戸時代後期の史料から、寄宿を受け入れた寄宿町の拡大過程（2.）、寄宿先の選択基準（3.）、寄宿町の負担と費用の分担、寄宿免許との関係（4.）を検討して、近世京都の町家の実態解明に寄与する事を目的とする。

2. 江戸時代後期の寄宿町の拡大過程

三条衣棚町（三条室町西入、図 1A）に残る嘉永 6 年（1853）の冊子『二條御番衆様御宿此度増町被仰付候一条之事』^{注5)}には、町奉行所から番衆寄宿について命じられた内容（以下①）が記される。

東洞院二条下町年寄長兵衛、其外百九十四町

二条御番衆交代之節、是迄寄宿いたし来町々、近来寄宿相勤候程之家数追々減少致差支難渋之次第申立、増町之義願出、無余儀相聞候ニ付、其方共町寄宿増町申付候間其旨相心得、元寄宿町申合、町分々致、順番相極、寄宿不差支様致申依請書申付ル（略）二條御番衆様交代之節寄宿之義、是迄東ハ堀川通西側迄、西ハ神泉苑町通迄、南ハ松原通、北ハ御池通上ル所迄、此度吟味之上、右町数之外ニ東ニ東洞院通迄、南松原通、北ニ条通迄 丑三月

寄宿を受け入れていた「元寄宿町」が、「寄宿相勤候程之家」が徐々

* 住環境文化研究所 学博

Culture and Life Environment Laboratory, Ph. D.

上訴を認めた町奉行所は瓦之町(「東洞院二条下町」)ほか 194 町、合計 195 町を増町に定め、従来の元寄宿町と「申合」を行って「町分け」や「順番」を決定するように命じた。元寄宿町は文中の通り名より二条城南側で堀川西側に位置した事が分る(図 1)。また『慶応四年改正京町絵図細見大成』(以下、『改正京町絵図』^{注6)})では、一部明確でないが、この範囲に大凡 80 町を数える事が出来る。

嘉永6年（1853）の町奉行所の増町命令は3月に記録され、毎年4月の二条在番交代に伴う番衆寄宿の前月にあたるので、同年は東洞院通沿いを東限とする増町195町（図1）も寄宿町に組み込まれた事になる。そしてさらに『二條御番衆様御宿、此度増町被仰付候一条之事』の末尾に「申合」の結果として、「宿割掛町」から三条衣棚町へ連絡された「順番」が次のように記録されている（以下②）。

東西は東洞院通沿いから油小路通西入迄、南北は二条通沿いから松原通沿い迄が増町である。その町数は①より195町であるが、三条通と四条通で南北に3分割されている(図1、『改正京町絵図』では北から大凡62町、60町、70町を数える)。これら3組に堀川西側の元寄宿町と合せた4組が右回りに1年交代、一巡すればまた最初からという順番を定めた事が分る(なお東堀川通沿いは増町に入っておらず、二条城の対岸にあたる同地は各藩の藩邸が並んでいた事に関係するのかもしれないが、明らかでない)。そうすると同文書を残す三条衣棚町は三条室町西入(図1A)に位置するから、先ず「寅年」の嘉永7年(安政元年1854)に、次回が4年後の安政5年(1858)という事になる。そして三条衣棚町の南北両町のうち北町に、嘉永7年の番衆寄宿記録(『御衆衆様御逗留中日記』、以下③)がある。

続いて万延元年（1860）3月にも町奉行所が増町を命じた記録が、町頭南町（新町三条上、図1B）の『御請書』（以下④）^{注7）}にある。

– 1434 –

表1 安政5年の寄宿町（寄宿有は○、無は―）

住所	建物	先跡	住所	建物	先跡
三条東洞院西入	会所	〇―	蛸薬師烏丸西入	会所	〇〇
室町三条通下 ^ル	会所	〇〇	三条烏丸西入	会所	〇〇
東洞院三条通下 ^ル	居宅	〇〇	西洞院六角下 ^ル	居宅	〇〇
烏丸蛸薬師通下 ^ル	居宅	〇〇	六角西洞院西入	居宅	〇〇
錦小路東洞院通下 ^ル	居宅	〇〇	油小路錦小路下 ^ル	居宅	〇〇
新町三条通下 ^ル	会所	〇〇	室町四条下 ^ル	居宅	〇―
炭屋団子町	居宅	〇〇	蛸薬師西洞院西入	居宅	〇〇
新町三条下 ^ル	居宅	〇―	小川六角下 ^ル	居宅	〇〇
蛸薬師東洞院西入	居宅	〇〇	錦小路西洞院西入	居宅	〇〇
烏丸通三条下 ^ル	会所	〇〇	醒ヶ井錦小路下 ^ル	会所	〇〇
三条室町西入	居宅	〇〇	烏丸錦小路下 ^ル	会所	〇〇
六角烏丸西入	会所	〇〇	蛸薬師油小路西入	居宅	〇〇
錦小路新町西入	会所	〇〇	室町蛸薬師下 ^ル	居宅	〇―
三条新町西入	会所	〇〇	烏丸六角下 ^ル	町持	〇―
蛸薬師新町西入	居宅	〇―	三条西洞院西入	居宅	〇―
六角東洞院西入	居宅	〇〇	西洞院蛸薬師下 ^ル	居宅	―〇
三条油小路西入	町持	〇〇	蛸薬師室町西入	居宅	―〇
東洞院錦小路下 ^ル	居宅	〇〇	六角新町西入	居宅	―〇
錦小路烏丸西入	会所	〇〇	越後突抜町	居宅	―〇
新町六角下 ^ル	居宅	〇〇	西洞院三条下 ^ル	居宅	―〇
新町蛸薬師下 ^ル	会所	〇〇	六角室町西入	会所	―〇
油小路六角下 ^ル	会所	〇〇	油小路蛸薬師下 ^ル	会所	―〇
東洞院蛸薬師下 ^ル	居宅	〇〇	油小路三条下 ^ル	居宅	―〇
油小路三条下 ^ル	居宅	〇〇	室町六角下 ^ル	会所	―〇

は275町-195町=80町となり、『改正京町絵図』に数えた町数とも一致する。堀川東側の3分割に数えた62町、60町、70町と比べれば10～20町も多いが、寄宿可能な町家の減少を訴えた堀川西側では受け入れ可能な町も減って(①)嘉永6年には60～70町になっていて、この数が後の増町の参考とされたのかもしれない。

そして嘉永6年から番衆寄宿が右回りに始まって2順目の最後、堀川西側の番となった万延元年(1860)に再び上記増町が命じられた。③の後段冒頭より増町は東が寺町通迄、北は二条通を超えて上京の竹屋町通迄、南が五条通迄、寺町夷川上^ル町(久遠院前町か藤木町)等261町に広げられた。ところが西側は設定が記されない。そこで②が東限とした東洞院通の東入を増町西限と仮定すると、『改正京町絵図』では大凡185町を数えて261町に大きく足りない。それでは②が嘉永6年の増町西限とした油小路通西入を増町西限とすると、竹屋町通より北側に37町、松原通より南側に38町を数え、185町+37町+38町=260町となって④の261町と整合する。このため万延元年(1860)の増町は嘉永6年の増町を取り囲むように拡大設定された可能性が高く(図1)、寄宿町の総数は275町+261町=536町となった。この数は元寄宿町の堀川西側80町から7倍近くになる。

なお福長町(富小路通三条通上^ル、図1C)には、文久元年(1861)の番衆寄宿記録と寄宿先リストがある^{注8)}。その寄宿先を図1に○で

プロットすると、南北が御池通下^ルから錦小路通上^ル、東西が東洞院通東入から寺町通迄となる(御池通沿いが高倉通西入1町だけの理由は明らかでない)。これに万延元年以前の右回り順(④)を考え合わせると、万延元年増町後もこれに沿った「町分け」や「順番」が想像される。しかし実は福長町の寄宿先リストには43人しか記されず、1組50人×2組=100人の番衆定員の半分にも足りない。そうすると同年は他の町々にも番衆寄宿があった可能性もあるが、万延元年増町の「町分け」や「順番」が明らかでなく検討出来ない。また文久2年(1862)8月には尊攘派の暗殺活動に対応すべく京都守護職が設置され、二条定番は常設となって(1.)交代入城を待つ間の番衆寄宿もなくなった。万延元年の順番が回ったのは3回、3年間であった。但し廃止翌月の9月に、次の文書が町代からもたらされている。

上者今出川、下者五条、東者寺町、西者御土居、右之方角之内、寺院并町方共建物間取数十間以上有之家之分、別紙之振合ニ相認書出候様被仰出候(略)

文久3年(1863)3月の將軍家茂上洛を控えて「十間以上」の寺院や町家を鴨川西側に広く求めている。番衆寄宿の選択条件であった5、6室に倍する規模であり、幕初から約230年、再び政治の表舞台となった京都で寄宿先の必要性が増した事が分る。三条衣棚町の記録『御寄宿之控』にも慶応2年(1866)10月16日～11月7日に幕府の「御徒目附」が、11月12日～12月12日に「陸軍付調達役」が寄宿した記録があり、さらに「組合町々申合、有合品々を如何様共いたし差支無之様」と記されている。この「組合」が万延元年の「町分け」や「順番」を受け継いだ可能性もあるので、二条在番廃止後の上洛武士による寄宿史料のさらなる収集が今後の課題である。

以上、番衆寄宿の寄宿町は長く二条城南側・堀川西側の80町が務めていたが、寄宿可能な家の減少で町奉行所へ上訴、これを認めた町奉行所は嘉永6年(1853)に堀川東側の195町を寄宿町に組み込んだ。合計275町は4組に分かれて4年に1回ずつ、右回りの順番で番衆寄宿を務めた。万延元年(1860)にも再び増町が命じられ、261町を加えた536町が寄宿町となったが、新しい順番は明らかでなく、3回の番衆寄宿を受け入れた後の文久2年(1862)に二条定番が置かれて番衆寄宿はなくなった。但し幕末の京都では上洛武士の寄宿先の必要性は増しており、町々への寄宿も続いていた。

3. 番衆寄宿のため町が用意すべき町家

番衆寄宿先の選択基準は、①に「寄宿相勤候程之家数」とあったが、先にも取り上げた三条衣棚町の嘉永7年(1854)の『御番衆様御逗留中日記』にも次のように記されている(以下⑤)。

三月七日廻章参り、此度二条様御番衆御宿、縄張之内ニ御座候間、五六間以上之建家、一町内ニ本宿一軒、控宿壹軒ヲ、御書出(略)当名家前建家図面認め、来^ル十日迄ニ御差図可被成候(略)

寄宿町に定まった三条衣棚町が町奉行所から触書(「廻章」)で命じられた内容は、「本宿」と「控宿」として「五六間以上之建家」を選び、その「建家図面」を提出する事であった。これに先ず番衆寄宿の町家には町側の選択と町奉行所の確認が読み取れるが、記された「五六間」が建物間口の間数か、部屋数(間取数)なのか、この点について同町に文久元年(1861)の以下文書がある(以下⑥)。

御番衆様御宿相勤候御時、家建間数之儀取調べ候様被仰渡候間、
左之通奉申上候

一、玄関何帖、表之間何帖、次之間何帖、奥之間何帖、勝手向
之間何帖、何屋何兵衛宅

一、玄関何帖、表之間何帖、次之間何帖、奥之間何帖、勝手向
之間何帖、町中会所家

外=控御家、四間以上、右者町中之内=而相勤申候、何組何通何
小路上/下/西入東入、何之町、年号月 年寄誰印

番衆寄宿に用いた町家の間取りと帖数を報告する際の案文である。
これに基づき三条衣棚町は、同年5月に「玄関六帖、表間十一帖半、
次間六帖、奥間十二帖、勝手向間九帖、千切屋吉右衛門居宅、玄関
四帖半、表十七帖、次間九帖、奥間十八帖、勝手向間十三帖半、千
切屋次兵衛居宅、外=控御家、四間以上、右者町中之内=而相勤申候」
等と記す文書を「御年寄様」へ提出した（「御年寄様」が町組か、惣
町か、どちらに属するのかは明らかでない）。このやりとりをみると、
番衆寄宿の町家には間取りと帖数が重要であった事になり、⑤の「五
六間以上之建家」は5、6室以上の間取りを持つと考えられる。

また⑤には「但し玄関無之向者書出し=不及候、認め振案紙之通りニテ
壹町分=四五軒御書出し又ハ右無之候ハ、壹式軒=而も不苦」と記す付
箋も付いており、玄関も不可欠であった。そこで三条衣棚町は町家
2軒について玄関を含む5室の帖数を報告したと考えられる。

以上、番衆寄宿のために町が選択すべき町家は、床上の間取りが
5、6室以上、その中に玄関があり、他は表間、次間、奥間、勝手向
間という構成が必要であった事になる。これが番衆寄宿の必要条件
すなわち町家の選択基準と推測されるので、実例で裏付けるために
史料を探すと、文久元年（1861）の福長町（図1C）の「御用達宿 近
江屋吉太郎」の居宅平面図がある（図2）。1階床上が「みせ」以外
に7室あり、玄関は「上口」が付く9帖に推定され、上記の選択基
準を満たしている。三条衣棚町も嘉永7年（1854）の番衆寄宿に用
いた町家に関して『御番衆様御逗留中日記』に以下を記す（以下⑦）。

門内一統集会上、相談仕候得共、兎角外之様ニ御宿出来候宅
も無御座候故、西村様御両家へ御願申候、然ル処右何連様共定メ
難ク候間、右両家籤取=致貴、当寅正月七郎兵衛宅ニテ吉右衛門様・
文右衛門様御立会ニテ籤取極ニ申候処、当年吉右衛門へ相当り申候
故、西村吉右衛門様御宅借り請相勤申候

「門内一統集会」は木戸門内側つまり南北両町の家持全員の相談を
意味し、これで「御宿」候補を「西村様御両家」に定めた。さらに
籤引きで西村吉右衛門居宅を選んでおり、先述の文久元年5月報告
にも「千切屋吉右衛門居宅」としてその名があった。尤も三条衣棚
町が文久2年（1862）11月に町奉行所へ提出した文書『寺院井町方
建物、間取数十間以上有之分尋ニ付届書』には、西村吉右衛門居宅と
して法衣商売の西村吉右衛門ほか「家内壹人、召仕十一人」が住む
同居宅の室名と帖数が以下のように記されている（以下⑧）。

七間 表間十一帖半、格子間六帖、玄関六帖、次之間六帖、奥
間十二帖、上台所五帖、下同九帖、西之方離間六帖・雜物入
二階五間、表間十六帖、東間八帖、奥間十一帖半、次之間八帖、
下台所八帖、内二帖板間

⑧の内容は、文久元年5月報告より詳細な情報を伝えている。

図2 近江屋居宅

図中（ ）内は筆者推定

図3 西村吉右衛門家居宅

図中（ ）内は筆者推定

1階床上は玄関を含む7室で2階は5室、合計12室となる。すると文久元年5月の報告は2階を記さず、1階も上台所5帖と格子之間6帖を省いていた事になるが、⑥案文に従ったためと思われる。

この西村吉右衛門家には野口徹氏による精緻な研究があり^{注9)}、弘化4年～元治元年（1847-64）の居宅平面図も復原されている。これを参照しながら⑧より室名や帖数を書き込むと図3になる。「西之離」以外は動線的に強く結び付いており、文久元年5月報告で省かれた上台所5帖と格子之間6帖も番衆寄宿に供された可能性が高い。そうすると番衆寄宿中の西村吉右衛門ほか家族等12名の居場所が問題となるが、この点は安政5年の寄宿先リストを参照したい（表1）。居宅以外の会所が17棟、町中持家が2棟あり、合計19棟は全48棟の4割を占める。髪結が入り込む場合が多かったとされる会所や無住の町中持家も^{注10)}、⑥第2項が会所に報告を命じていたように、玄関を含む間取りの選択条件を満たせば番衆寄宿に用いる事が認められていた。その場合、番衆寄宿に関わる労働力は町側が用意・提供した筈だから、居宅の町家を寄宿に提供した町家持主も、寄宿中は家族等と共に別の場所へ移っていた可能性が高い。それには当然金銭的負担が予想されるが、それを誰がどのように分担したのか。ほかにも番衆寄宿に伴う負担や費用分担があり、次節で検討する。

以上、寄宿町は番衆寄宿のため1階床上に5、6室以上、玄関は不可欠で表間、次間、奥間、勝手向間も備えた町家用意の必要があり、選択基準として町中から選んだ。但し選択条件を満たせば会所や町中持家でもよく、むしろ住人移動の必要がそれらは積極的に用いられた可能性もある。尤も三条衣棚町が『御番衆様御逗留中日記』に「当町内会所ニ而ハ御宿出来不申」と記したように、選択条件を満たさない会所や町中持家は当然の事ながら用いる事は出来なかった。

4. 番衆寄宿に伴う寄宿町の負担と分担

三条衣棚町の南北両町は、番衆寄宿の手順を記す『御番衆様御寄宿御勤方相心得覚』（以下『心得覚』）をそれぞれ保有した。両町が所属する「下古京上良組」の名前で「今般格別間遠勤番廻候義ニ付々々往前者も追々品替りニ成行候間、前々之通町々しかと控置（略）不同無之様相勤趣之御沙汰」と記され、嘉永6年（1853）の増町で4年に1度（町運営が南北に分かれた三条衣棚町は内部的に8年に1度）の番衆寄宿となった組内町々に「不同無之様」のため配布された事が分る。したがって番衆寄宿の一般的形態と判断され、本節ではこの『心得覚』と、三条衣棚町が初めて番衆寄宿となった際の『御番衆様御逗留中日記』（以下『逗留日記』）、安政5年（1858）の南町の番衆寄宿となった際の『二条御番衆様御宿中諸事控』（以下『宿中諸事控』）を照合して番衆寄宿の負担内容と分担を検討する。

まず『宿中諸事控』から、安政5年正月27日に町奉行所配下の町代から「当年ハ御番所様御宿御勤番ニ付、当主之絵図面、当月中ニ差出」との連絡を受けた南北両町は、嘉永7年から4年ぶりの番衆寄宿について2月1日に町内家持全員が相談。「当年ハ南町之番」として南町の「西村妙教様」居宅を寄宿先に選び借りる事を決めた（「御宅御拝借申上ニ極メ」）。そして北町が選んだ「控宿」と共に「絵図面」を用意して町代へ提出、2月13日に町代が下見に来た。3月4日と同月26日には東町奉行所からの召喚があり、4日に出向いた町役人は「御番衆様御宿請書」の提出命令を受けたので26日に提出した。

4月1日には町内全員で「御逗留中入用遊す道具」を確認したが、『逗留日記』に「御客入用家具其外少々之入用品ハ西之洞院下立売上ハ枳屋源七殿ニ而借り受け（略）夜具類も右同断」とあるので、不足道具や寝具等は、他町の貨物業者から借用したと思われる。4月7日には町内家持全員が西村妙教居宅へ出向いて「御道具相調べ、并ニ座敷廻り本飾付」を行う。この飾り付けの内容も『心得覚』に次のように記されていて、寄宿町共通の仕様であった事が分る。

飾付 掛物、但目出度図、且朔日掛変之事、三宝熨斗・昆布、刀掛、毛氈、床花、天目台并茶碗・御茶、多葉袴盆、但し灰吹青竹、外ニ御客来有之節差出候多葉袴盆式ッ余

御居間 綺麗なる座敷処、御具足下敷 綿緞通、屏風、高杯、座布団、鑓掛、殿様湯衣、手拭掛

湯殿便所 成丈ハ綺麗いたし置候事、手洗い朝場ニ楊枝・毛剃受、日々御月代被遊候ニ付用意之事、湯殿 手拭ぬか袋茶碗之湯

次之間 御用人・御家来 たば古盆用意いたし置事

同じ4月7日、先番の番衆に「御宿」を「御引渡」する前の事前検査として「御見分役人」来訪が町代から予告される（「明八日五ツ時迄ニ番様御宿御引渡為、御見分御役人中御出被成候」）。これにより番衆寄宿の町家は、町内家持全員で選択、持主から借りて飾り付け、町奉行所による事前確認を経て、番衆へ引き渡された事になる。

続いて主に『心得覚』から、番衆が到着して以降の経緯をみる。

到着予定 御先番御殿様四月十一日御上着、右御入城十三日、御先番御跡登御殿様四月十二日御上着、右御入城十四日（略）御跡番御殿様四月十三日御上着、右御入城十五日（略）御跡番御跡登御殿様四月十四日御上着、右御入城十六日

先番にも跡番にも「御跡登」があるので、到着は4期に分かれた

事が分る。しかし『宿中諸事控』では先番として番衆の旗本「多門鎌之助様」ほか御用人・侍・中間2人つまり上下5人が4月11日午後7時（「夜五ッ半」）到着→13日午前3時（「朝七ッ半」）入城。続いて跡番の番衆旗本「松本蔵之助様」ら5人が同13日午後8時（「朝五ッ時」）到着→15日午前3時（「朝七ッ半」）入城とあり、先番1名と跡番1名、合計2名の寄宿である。これは他の寄宿町にも共通するので（表1）、到着は4期に分かれても1町の番衆寄宿は先番と跡番の2名が基本であったと判断される。また寄宿期間は2泊3日で到着から2日後の入城も『心得覚』と整合するが、先番が去ってから跡番が入るまでは5時間しかない。実質的には4月11日夜～15日早朝の4泊5日間、町家内部に常に5人が滞在して、その食事や入浴等の用意、掃除や片付が連続的に必要であった事が窺える。

なお、万延元年（1860）増町を経て文久元年（1861）の寄宿町になった福長町には4月12日の1人しか記録されない（2.）。同年の寄宿先リストには4月11日到着が21町、4月12日到着が20町、合計43人の寄宿先があるが、間は1日しかなく、先番と跡番とは考え難い。それよりも到着が2期に分かれた先番の可能性が高く、同年の跡番の動向は、万延元年設定の順番と共に今後の課題である。

以上、番衆寄宿の一般的形態は上記の福長町の例ではなく、『心得覚』と『宿中諸事控』が整合した三条衣棚町の安政5年の例に推定される（嘉永7年『逗留日記』は二条破損奉行ら上下8人が4月6日夕方～13日朝の8泊9日寄宿を記す。これは同6日の御所出火に始まった大火「毛虫焼け」の影響で交代が遅延したためと思われる）。

宿札配布・掲示・出迎え 御殿様御宿札并御人数御目録書、町代ヨリ御渡被相成、御殿様御着候迄奉差上可候事（略）御殿様御宿札相掛候如此之札被渡置候事（図略）、但板ニ張置、門ニ御掛置候事、尤夜分御仕舞之節者、高キ所ニ御掛置候事（略）夜分当主之門口釣提灯差出し候事、御殿様御名前書記張置事

番衆の到着前に、誰が何人寄宿するか、目録と宿札が町代から町組を通して寄宿町に届くとある。『宿中諸事控』でも町奉行所の事前検査後に「町代衆寄場」で宿札を受け取り、板に張って寄宿中の日中は門に掛け、夜間は取り込み代わりに番衆の名前を記した提灯を門口に釣ると記す。また『心得覚』は、到着日は町側が寄宿番衆の名前を記した板を掲げて早朝から出迎え、町家へ到着した際は袴姿の町役人と羽織袴の町家持主に出迎えを定める（「年寄袴上下ニ而門口迄御出迎、并宿主者羽織袴ニ而同断之事」）。番衆が座敷で着座すると次之間から規定の口上（「御道中御機嫌良御着被遊、恐悦至極奉存候」）で「丁寧ニ御挨拶」を定める。町家持主が記されるのはこの「御目見え御挨拶」だけで、後は町が用意した年少者が世話をし（「其余之給仕小用之義者十四、五才斗之者ニ羽織袴」）、町が饗応を行き届かせ（「御殿様夜分御酒肴等之義臨機応変ニ程能取斗」「珍敷品折々ニ差上候様いたし候得者都合よき」）、番衆の外出時は町役人の案内（「御殿様外方ニ御出候節御案内」）まで定める。また福長町は『出勤役割』に「座敷殿様取持二人、付添一人、表間・中間取持二人、三条寺町御迎四人、蹴上迄御出迎四人、下働之者二人、下小使働之者二人、惣取締後見一人御役中、外ニ料理人ひかきや、道具洗方二人、茶番、酒之間方」をあげており、料理人以外の延べ23人は町内労働力と思われ、ここでも町家持主や家族等は他へ移った事が窺える。

なお料理人が調理する食事は『心得覚』に到着日の「御着祝酒・御膳・夕食」から中日の「朝飯・昼飯・夕飯」、入城日の「朝飯・御弁当」まで、品数・献立が細かく定められる。味付けも「江戸子ハ白味噌汁者不用甚不機嫌、何分赤味噌」等と注意が促され、酒も「何卒本伊丹精々宜敷御吟味」と伊丹産推奨の付箋が付いている。因みに『宿中諸事控』は入城日の差し入れ弁当を外注と特記するので（「御昼弁当城内へ差入、神泉苑町鉾助方へ申付」）、上記食事は福長町同様に料理人を雇って寄宿先での調理が一般的であったと推測される。

このほか『心得覚』は、到着日の風呂の用意（「何時御着之程も難計候間、風呂場第一早々わかし置」）や入城前夜の寄宿先での終夜待機も御迷惑と注意している（「朝七時=御出立被遊候間、何連夜通に=致居候而者御差支=相成候間、此儀しかと相心得」）。

以上、番衆寄宿は町内町人の実働で多くを補ったが、寝具等の諸道具は外部から借用した。料理人の手配や食材・酒の調達、町家持主の移動にも金銭的負担の発生が推測される。そこでこれらを誰が負担したのが問題となるが、この点について『逗留日記』には、嘉永7年の番衆寄宿後に三条衣棚町は町奉行所から「二条御番御宿町御逗留中御賄料」や「差出し物等取調」を命じられ、「殿様御賄、同御下七人様、上之分夜具・同下之分」として町奉行所内の町代部屋の「宿割掛」へ銀184匁1分6厘を報告、5月12日に報告相当の金2両2歩2朱510文が「御賄料入」とする。前述のように同年は8泊9日分で一般的な4泊5日分の倍額にあたる可能性が高いが、とにかく寄宿町の負担費用は、町奉行所配下の町代を介し寄宿町以外の町々へ割り当てられた事が窺える。この点に関して万延元年

（1860）の増町を伝えた『御請書』（④）にも以下が記されている。

（略）宿可勤家建無之町々之向者不相勤儀を当然之事=相心得居候様=而者不相当=付、是迄寄宿相勤来候町々惣代共弼申立候通
（略）宿相兼町々順番=組合不可成とも、平等=無懈怠相勤候様いたさせ、依而寄宿町々もの共一同、請書申付ル（略）

町奉行所は、町内に番衆寄宿の選択条件にあう町家がないとして「順番」に加わらない町が「当然」と考える事を「不当」とし、「平等」の負担を命じている。そうすると、これ以前は寄宿町でありながら選択条件に合う町家がないとして番衆寄宿を回避した上に、割り当てても受けない町が存在した事になり、その増加が堀川西側の町々の難渋や上訴、増町の理由に推測される（①）。つまり番衆寄宿の負担費用の割り当てが寄宿町以外の町々へ行われていた事が窺えるのであり、町奉行所が命じた平等とは、割り当て免除の寄宿町であっても回避した町は割り当てを徹底する意味であったと思われる。

また京都には御所から「諸役免除札」「寄宿免許札」を付与され、町人義務を「免除」、寄宿を「免許」される朝廷関係者や御所御用達がいた^{注11)}。ここで「免許」が「許可する事」なら寄宿免許は寄宿受け入れの許可であるが、『京都御役所向大概覚書』が「諸役寄宿御免許之義」つまり「諸役」「寄宿」共に「御免許」としながら文中では「諸役免許」「寄宿免除」とするので（「諸役免許之初者後陽成院御治世^リ初^リ、夫^リ以前者寄宿免除計被下候由」）免許は免除と同じ意味である^{注12)}。「諸役寄宿御免許之義」は「諸役免除之分」と「寄宿御免除之分」を331人あげており、彼らは住まいを選択対象から外されただけでなく、負担費用の割り当ても免除されたと考えられる。

以上、番衆寄宿の町家は町が選び、持主の町人から借りて諸道具の用意や飾付等も行った。そして町奉行所の事前確認を受け、御宿として引き渡し、普通は4泊5日間、町側が世話をして町家持主や家族等は別の場所へ移っていた。金銭的負担は寄宿町以外に割り当てられたが、万延元年からは条件に合う町家がないとの理由で受け入れを回避した町にも割り当てられた。他方、御所から諸役や寄宿の免除札を付与された者は、選択対象から外された可能性が高い。

5. 本論のまとめ

- ・二条在番の番衆寄宿は二条城南側で堀川西側80町が相当期間務めたが、選択基準を満たす町家の減少を理由に回避する町が増加、他町の負担が大きくなったので嘉永6年（1853）に上訴、堀川東側195町が増町に定められた。合計275町は4組に分かれ右回りに4年に1回の番衆寄宿という順番を定めたが、万延元年に再び増町となり、嘉永6年の増町周辺の261町を加えて合計536町となった。その順番は文久2年（1862）の二条在番廃止迄に3回機能した筈であるが、内容は明らかではない。
- ・当時の町家の選択条件は、1階床上に5、6室以上、玄関があって表間・次間・奥間・勝手向間もあり、風呂や便所も備えた町家であった。この選択基準に合う、合わないで寄宿町の町家は二分されたが、条件を満たせば会所や町中持家も利用出来た。
- ・番衆寄宿先の町家は町が選択、町家持主から借り、寝具や諸道具も用意して飾り付けを行った。そして町奉行所の事前検査を経て先番跡番2名の番衆へ御宿として引き渡し、4泊5日が基本の寄宿期間中は町が労働力を提供して入念に世話をを行った。
- ・番衆寄宿に伴う金銭的負担は、町代を介して寄宿町以外の町々へ割り当て、万延元年からは寄宿町にありながら回避していた町にも割り当てられた。但し御所から諸役免除や寄宿免許の木札を付与された朝廷関係者や御所御用達は住まいを選択対象から外され、負担費用の割り当ても免除された可能性が高い。

注

注1) 京都御役所向大概覚書、上巻「三十將軍宣下相済候=付、為御名代松平讃岐守殿御登之節勤方之事」より「松平讃岐守殿今度上京=付、右之内下宿借宅仕度旨家来菅彦助申出候=付、勝手次第之旨申聞候、尤右町中江も申渡候事」、清文堂史料叢書、第5刊、清文堂、1973

注2) 藤川昌樹：近世武家集団と都市・建築、中央公論美術出版、2002

注3) 上掲注1)より「余慶分者追而被除積と奉存候」

注4) 国史大辞典、第10巻、二条在番、吉川弘文館、1990

注5) 京都府立総合資料館蔵、三条衣棚町文書、本文中の他の同町文書も同じ。

注6) 京都府立総合資料館蔵

注7) 京都府立総合資料館蔵、町頭南町文書（乙）

注8) 京都府立総合資料館蔵、福長町文書、本文中の他の同町文書も同じ。

注9) 野口徹：日本近世の都市と建築、法政大学出版、1992

注10) 西川幸治：日本都市史研究、日本放送出版会、1972

注11) 丸山俊明：京都の町家の軒先板の再検討、日本建築学会計画系論文集、第634号、pp2747-2754、2008.12

注12) 清文堂史料叢書5刊、京都御役所向大概覚書、上巻、清文堂、1973

（2008年10月10日原稿受理、2009年3月6日採用決定）